

未来につながるお口の機能～子どもの摂食機能の発達～

大久保 真衣

東京歯科大学

口腔健康科学講座 摂食嚥下リハビリテーション研究室

お口の機能の中でも食べたり飲んだりする機能、摂食機能は、生まれてから獲得する機能です。つまり生まれ持ってすぐにできる機能ではありません。摂食機能は実際に「食べること」によってより効率よく習熟されます。ところが、摂食機能の発達には個人差が大きく、その学習過程において、「なかなか飲み込まない」とか「嚥まない」という訴えは幼児期において、比較的多い訴えの一つです。

また、摂食機能に関わる多くは、乳幼児期に獲得されます。この時期に正の因子によって機能が発達することは、将来成人、高齢者になっても良い影響があると考えます。

現在、ライフステージに応じた口腔機能管理（お口の機能を診ていくこと）が注目されています。高齢になるとお口の機能は低下していくことがあります。しかし急に機能が低下する訳ではなく、多くは徐々に機能が低下していきます。元々、習癖などでお口の機能が低い（弱い）場合には、高齢による低下が急激に感じるかもしれません。実際に、小児時期ではない若い大学生の中でも舌の力や口を閉じる力が弱い学生もいます。これはお口の機能の発達不全も一因ではないでしょうか。彼らが高齢になった時に問題が複雑になるかもしれません。

子どもの摂食機能の発達は今まで一度も獲得されていない機能を獲得していくことです。例えば、自転車の補助輪を外すのに、簡単に出来た子と大変だった子がいたように、摂食機能発達も様々です。そこで定型発達の摂食機能が各成長ステージにおいてどのような発達変化するのか、よく保護者の方が食事に関して尋ねられる質問、家族で（例えば、祖父母の方がお孫さんと一緒に）できるお口の機能の練習などもお話できればと思います。

大久保真衣

東京歯科大学口腔健康科学講座摂食嚥下リハビリテーション研究室

略歴：1999年東京歯科大学卒業、2003年昭和大学大学院歯学研究科（口腔衛生学専攻）修了、2003年昭和大学歯学部歯科放射線学教室員外助手、2004年東京歯科大学歯科放射線学講座病院助手、2005年東京歯科大学歯科放射線学講座助手、2011年東京歯科大学千葉病院摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科講師、2015年英国クィーンマーガレット大学に研究留学、2017年東京歯科大学口腔健康科学講座摂食嚥下リハビリテーション研究室准教授

